

第4回福山市学校教育環境検討委員会の会議概要

1 日 時 2014年(平成26年)4月24日(木) 10:00~12:00

2 委員

◎委員長, ○副委員長

名 前	役職名	名 前	役職名
◎秋川陽一	福山市立大学教育学部教授	森美智代(欠)	福山市立大学教育学部准教授
○永井純子	福山平成大学福祉健康学部教授	村上勝士	福山市自治会連合会会長
小野明人	福山市民生・児童委員協議会会長	藤井春勝	福山市公民館長会会長
平田誠治	福山市PTA連合会会長	藤原理絵	福山市PTA連合会監査委員
西本紀子	福山市PTA連合会女性部会長	岡本康成	福山市子ども会育成協議会会長
荒木一夫	福山市公立小学校長会会長	川崎富男	福山市公立中学校長会会長
松本茂太郎	福山商工会議所副会頭	喜多村祐輔	福山青年会議所理事長
藤本和士(欠)	連合広島福山地域協議会事務局長		

3 概 要

- (1) 教育長挨拶
- (2) 事務局報告・説明
 - I 第3回検討委員会の概要
 - II 望ましい学校規模等に関するアンケート調査について
- (3) 審議事項
 - I 教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について
 - II 児童生徒にとっての学校での快適な教育環境と最適な教育環境の在り方について

【意見】

《アンケート調査について》

- ・前回の管理職等を対象としたアンケート調査に加えて、経験の浅い若手教員を対象にした調査を行ったが、結果に大きな差はなく、ほぼ同様の意見であるということが分かった。
- ・結果をみると、小学校と中学校では、望ましい学級規模に対する意見が少し異なっている。小学校は一人ひとりに目が行き届く個別指導ができること、中学校では集団の中で自己肯定感を高めることができることが、学校規模・学級規模を考える上での視点となっている。

《教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について》

- ・答申においては、望ましい学校規模等について、小学校と中学校それぞれの考え方を示すこととする。
- ・自己肯定感の育ちなど、年齢による発達の違いも踏まえて、どの位の学校規模・学級規模、集団

が望ましいのかということを考えていく必要がある。

- ・望ましい学校規模等を考えるとき、教員の立場からは、子どもたちに人間力、生きる力をつけるために、また、子どもに確かな学力をつけるためにはどのような学校規模等が望ましいかという視点で検討することが必要である。
- ・育ちの側から、子どもと教員、それぞれの力を伸ばすような関わりができる学校規模等であることが重要なポイントである。
- ・アンケート結果をみて、学校の理想とするものについて、コンセンサス・賛同を得る必要があると思った。アンケート結果も、委員の意見も、児童生徒数がある程度必要だという意見が大半だが、学級規模の下限はいくらであるのか、複式学級の学校の保護者は現状をどう思っているのか、通学は倍の時間かかっても児童生徒数の多い学校に行かせたいのかなど、過小規模校又は小規模校の親の思い・意見を聞いてみると、違った形でのまとめができるのではないかと思う。

《望ましい学校規模について》

◆学級数

- ・アンケート結果では、小学校は3学級次いで2学級（小学校全体で12学級～18学級）、中学校で4学級次いで3学級（中学校全体で9学級～12学級）が望ましいという結果になった。
- ・中学校では、生徒は、学級、学年、さらに学校、クラブ活動、学校行事などの集団生活・学習の中で自己肯定感を高めることから、ある程度の生徒数、集団規模が必要であり、学級は複数であった方が良い。
- ・単学級（1学年1学級）でクラス替えがなく、人間関係が固定化するという事は良くない。
- ・子どもの側から考えると、人間関係がうまくいっていないときなどは、クラス替えでリセットすることもできるため、単学級より複数学級であった方が良い。
- ・「小学校時代の友達関係が理由で、公立中学校に行かせたくない」と、私立中学校等に進学する場合がある。子どもは成長とともに強くなっていくが、こういう課題に対応するためにもクラス替えによってリセットできる学校規模があった方が良い。
- ・小規模の中学校では、クラブの数が少なく、やりたいクラブ活動ができないことを理由に、他の中学校に行く場合が多い。また、小規模校で育った後、高等学校に進学して大きな集団でやっていけるのかという不安がある。

◆複式学級

- ・児童数が少ないため仕方がなく複式学級になっているのであって、同年齢・同学年で教育を受けることが基本である。
- ・一人ひとりに目が行き届き、異学年で学級を編制することにより下級生は上級生をみて育ち、上級生は下級生へ思いやりの気持ちが育つという良さもあると思うが、指導の観点から言うと、意見交換をするにしても、内容を深めるということでは不十分である。子どもが互いに切磋琢磨するという事では、集団としての人数が必要である。
- ・授業の質の確保を図る上で、複式学級は解消していく方が望ましい。

◆過小規模校

- ・子どもの成長を時間軸で考えると、いずれかの学年がない、いずれかの学年が複式学級というのは望ましくないと思う。その状態が、その地域で継続して続いているというのも望ましくない。

《望ましい学級規模について》

- ・アンケート結果では、小学校では26人～30人、次いで21人～25人、中学校では26人～30人、次いで31人～35人が望ましいという結果になった。
- ・小学校では、「良いところ見つけ」という活動で、先生が児童一人ひとりの頑張っているところ、良いところを見つけて、それを保護者に教えてくれるということを行っているが、子どものことをよく見てくれており感心している。アンケート結果に出ているように、1学級26人～30人程度が、先生が一人ひとりの良さを見つけるのに良い規模、適正な規模なのだと痛感した。
- ・1学級の人数の下限のひとつの目安として、複式学級の編制基準（小学校では第1学年を含む場合は8人、第1学年を含まない場合は16人、中学校では8人）がある。

《小中一貫教育推進の取組について》

- ・学校（教育委員会）は、「今学校はこういう状況にあるが、このような手立てを図り、取り組んでいます」ということを保護者に伝えて欲しい。このことは保護者との信頼関係につながる。
- ・各中学校区では、子どもと教員、そして保護者がつながり、安心して中学校へ進学できるように小中一貫教育の推進に取り組んでいるが、もっとアピールが必要なかもしれない。地域に根付いた学校にしていく取組を大事にして、引き続き行っていきたい。
- ・本委員会への諮問は、『小中一貫教育を進める上で』ということを前提にしている。城北中学校区での小中一貫教育の取組においては、昨年度から、中学校教員が小学校6年生へ乗り入れ授業を行い、児童は中学校での授業の仕方や学習規律などを学んでいる。今年度、その児童が中学校に入学したが、中学校教員からは「生活態度が良く、指導がスムーズに行く。生徒指導より学習指導に時間がかけられる」と聞いている。感覚的なものかもしれないが、小中一貫教育の取組の成果が見えてきているのではないかと思う。

《児童生徒の健全育成のための教育環境の整備について》

- ・子ども会では、地域と一緒に様々な行事・活動を行うことを通して、子ども同士の仲間意識を醸成し、子ども達の健全育成に努めてきた。最近、少子化で子ども会へ加入する会員の数が減ってくるとともに、加入しない世帯も増えてきている。非行の低年齢化により小学生の非行が増えてきている状況の中で、子どもの健全育成のための充実した活動ができなくなってくる恐れがある。

《教員について》

- ・近年、学校現場では若手教員が増え、ベテラン教員が減ってきている。若手教員の力量をいかに伸ばしていくかということが重要である。若手教員の配置先の学校規模については現状もあるが、ベテラン教員のノウハウを若手教員に伝えていくための研修等の充実を図る必要がある。

【まとめ】

○諮問事項の1点目、「教育効果を高めるための望ましい学校規模等の基本的な考え方について」は、これまでの検討委員会の意見を踏まえて事務局で答申の原案を作成することとし、それをさらに検討、整理していくという作業を行い、答申にまとめていくこととする。考え方が一つにまとまらない場合は、両論併記のような形になることもあるかもしれないが、委員会で合意を得ながらまとめていく。

○諮問事項の2点目、3点目について、順番に、論点を絞って検討していくこととする。